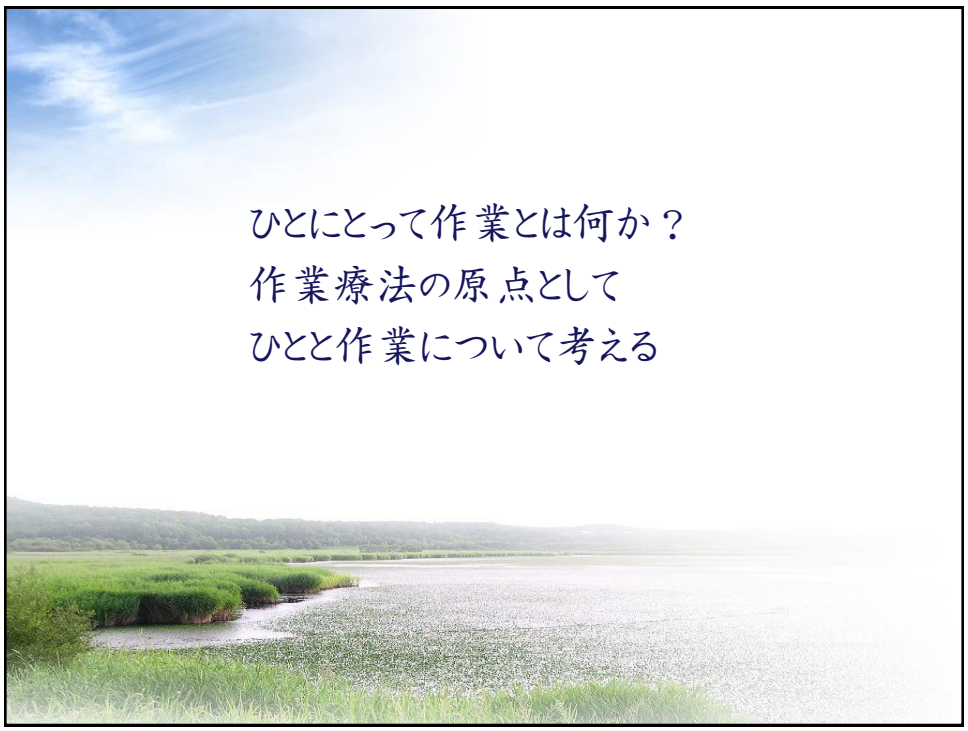
ひとと作業・作業活動

Hiroshi Yamane； OTR, PhD
Human Health Science
Graduate School of Medicine Kyoto University



ひとにとって作業とは何か？
作業療法の原点として
ひとと作業について考える

ひとと作業の関係

Relation between person and activity

Key words of Occupational therapy

•誕生する	be born on the earth
•重力のなかで生きる	live in gravity
•一日と一生	a day and life
•作業遂行	activity performance
•身体と機能	body and function
•身体図式と身体像	body schema and body image

平凡な生活

「今日はええ天気よ,おとうさん」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

神棚の榊の水を替え
部屋の掃除をし
庭の草花に水をやり
一人で食事をすませた
家の横にある小さな菜園には
年中神棚に絶やさぬようにしている花々と
今年もキュウリとナスの苗を植えた
それぞれ3本も植えれば一人暮らしの身には
一夏新鮮なキュウリやナスに困ることはない

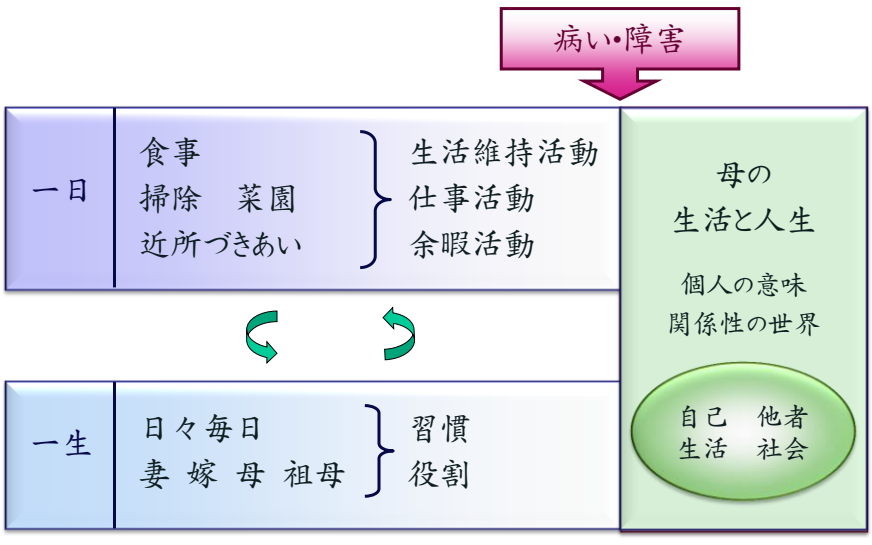
平凡な生活

脳梗塞で倒れ
最後には自分の子どもの顔も
分からなくなった夫を看取り
一人暮らしになって30年余り
毎日繰り返してきた日々のいとなみである
以前は　町に住む息子の家を訪ねて2,3日
過ごすこともあった
まだ身体に自信はあるが
80歳の声を聞くようになってから
列車を乗り継いでの長旅は億劫になった
米寿を超えて軽いアルツハイマー型認知症の兆候がみられはじめた

平凡な生活

母にとって
ここには自分の一生のすべてがある
小さな家の中は目をつむってでも歩くことができ
いつも使っている生活道具は
身の一部のようになじんでいる
この地に生まれ，働き，嫁ぎ，子どもを育て
父や母，夫を看取った
何十年も目にしてきた風景
すっかり身体になじんだ家と道具と
毎日の家の中の仕事，夫の墓，なにやかやと
季節々々の行事や隣近所とのつきあいがある
親戚もいる

母の生活と人生



私たち一人ひとりは
ただ一つの身体をもって生まれ
ただ一つの身体として或る

その身体を通して
世界と向き合い
世界を知り
私を知る

その身体を通して
私と世界との関係を知り
なすべきことを判断し
自分の思いを他者に伝え
その思いを実現する

病いや事故は
自己と身体の
乖離を引き起こし
生活に支障をきたす

なぜ？

「できそう」「なんとかなる」という感覚
この確からしさは何から生まれるのか？

自分の思いを他者に伝え
その思いを実現する

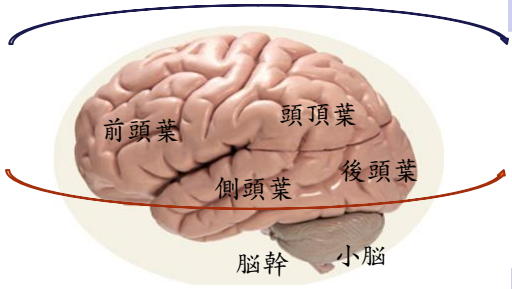
そのすべては
だれのものでもない
私という
ただ一つの身体を通して成りたつ
私という
身体を通してしか成りたたない

私が或るということ
それは
私という身体を
私が生きているということ

脳と精神:二つのアプローチ

神経生理学的アプローチ

二つのアプローチは視点の違い
同じ対象を扱っている



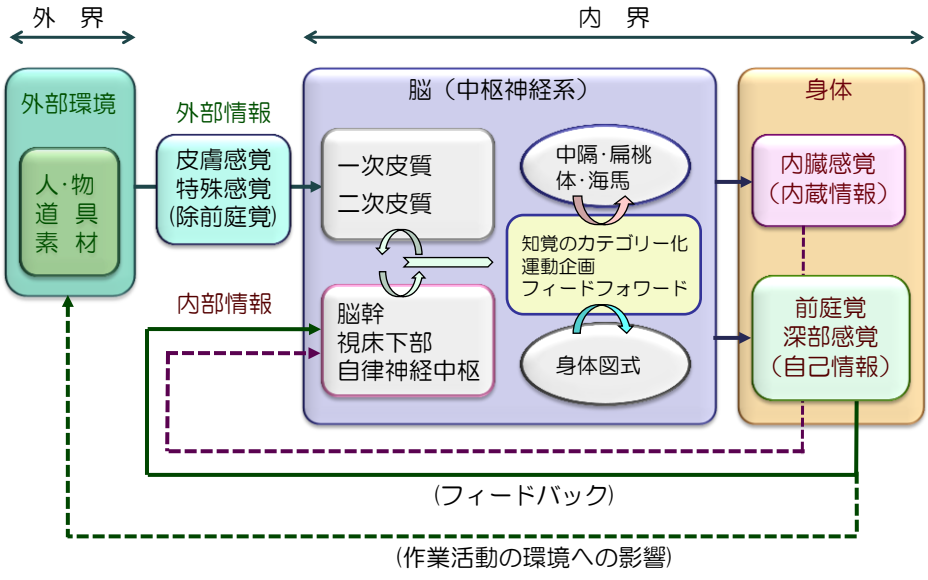
脳機能と精神
脳は精神の器官

脳の構造はDNAにより定められ
脳の機能は環境と経験で変わる

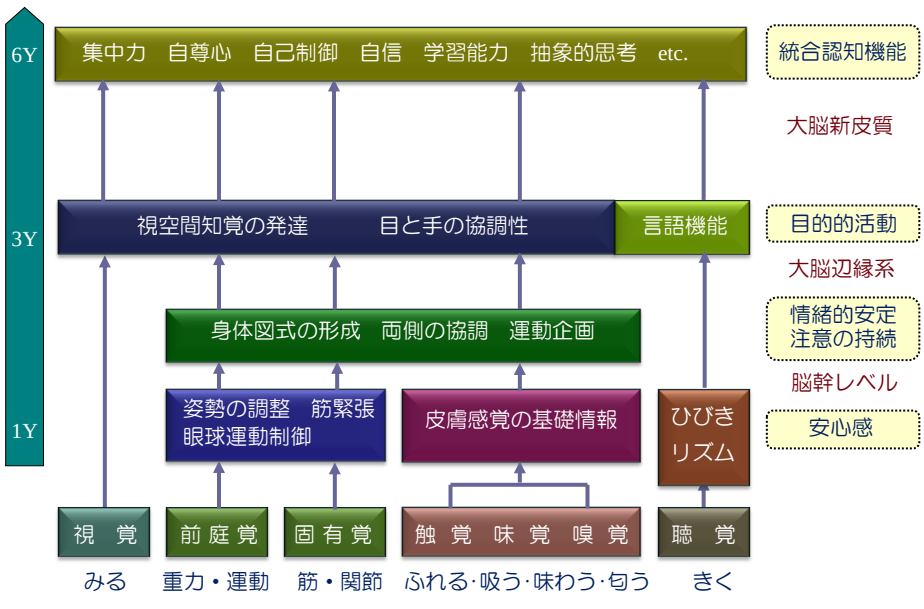
精神力動・分析的アプローチ

脳という客体を扱う神経生理学は客観性をめざすが
人間という主体を扱う精神力動は主観性を分析する

脳機能と身体，対象との関係



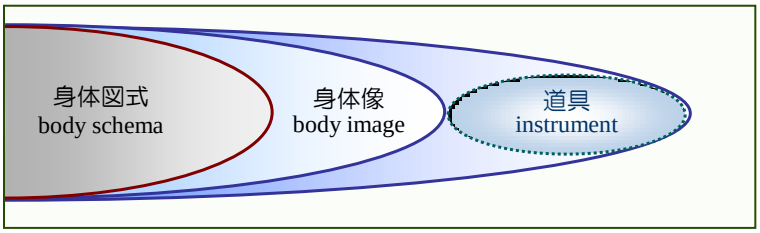
統合認知機能と感覚の発達　(Ayres,1979改変)



日常と身体 Daily life and body

身体図式 body schema
- 経験により更新される習慣的身体 habitual body
- 感覚•運動の蓄積による恒常的表象 constant symbol
- 自分の身体の空間的イメージを成立させる意識下の働き
  Unconscious working that makes spatial image of own body

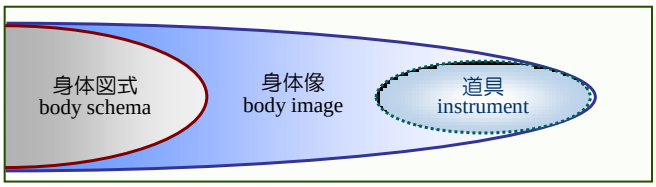
身体像 body image
- 意識された身体の施工図 blueprint of conscious body
- 身体を使うときに，身体図式を元に立ち上がる
- 道具を使うとき，道具は身体の延長として身体像に取り込まれる
  The instrument is taken into the body image as an extension of the body.



日常と身体 Daily life and body

対象との相互性のなかでダイナミックに変動しながら安定性を
保っている身体図式，身体像により
私たちは環境や状況に適応した生活ができている

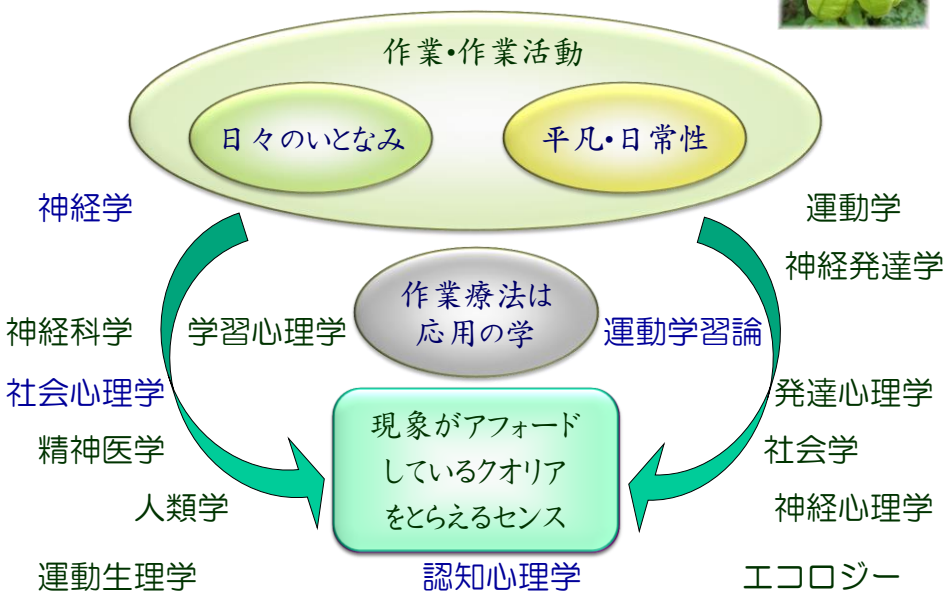
Because of the body schema and the body image being kept in dynamic change and stability through the interrelation with the object, we can adjust to the environment and live.



ひとと作業の関係

Relation between person and activity

作業・作業活動の特性と利用



作業療法でもちいる作業

生活維持活動	身辺処理 生活管理
仕事活動	職業　学業　家事　育児
遊び・余暇活動	原初的遊び　余暇 社会的活動
社会生活関連活動	移動　情報伝達 消化　精神身体的再生産
休養・熟成	

ひとと作業の関係

ひとが作業をする	能動性	意志がはたらく
	身体性	からだを使う
	操作性	素材道具を扱う
	目的性	目的に導かれる
	没我性	我を忘れる
作業の課程と結果	意味性	価値･意味をともなう
	具体性	過程結果があきらか
	投影性	気持ちが表れる
ひとと作業をする	共有性	体験をともにする
作業がなされる場	トポス	作業が生む環境

作業の意味・機能・利用

作業活動に伴う機能	—	感覚・リズム・運動
作業活動を行う機能	—	感覚・認知・運動系
作業そのものの意味	—	社会・文化的意味 個人史的意味
作業結果がもつ意味	—	心身の状態の投影 具体性
作業を共にする機能	—	五感を通した体験の共有

作業の意味・機能・利用

作業活動に伴う機能	—	身体自我・現実感の回復 心身の基本機能の維持・改善 心身の賦活と鎮静
作業活動を行う機能	—	発達・学習 自己認識・現実検討
作業そのものの意味	—	動機，回想
作業結果がもつ意味	—	非言語コミュニケーション 有用感，達成感，有能感
作業を共にする機能	—	ひととの関わりの回復

作業をすることの意味

生活のリズムを整える
- あてにされる役割がある
- 日中，活動する場がある
- 適度な身体活動にともなう発散と良疲労

社会生活における免疫力をつける
- 思い通りにならない体験
- 他者とすごすことで得られる普遍的体験
- 愛他的体験による自己尊重感

作業をすることの意味

社会生活技能を獲得する
- 役割，協力に必要なコミュニケーション
- 生活情報の入手

自分の状態や能力を知り，自分を受け入れる
- 自分のできることを知る（現実検討）
- 自分ができないことの受け入れ（障害の受容）
- こうすればできる確からしさの確認

作業をすることの意味

心身の基本機能の維持・改善
- 作業の能動性ー意志が働く
- 作業の身体性ー身体を使う
- 作業の操作性ー道具や素材を使う
- 作業の目的性ー目的に導かれる

よりよい休息と体験
- 治療・療養・養生と自己受容
- 病や障害をひととき忘れる

作業をもちいる療法
Occupational Therapy

作業療法の知恵と輪

ひとが生きている
あまりにも平凡に目に映る
その意味と仕組みを理解し
その知識と技術使い　人との交わりを活かし
病いや障害により失い奪われた
平凡さと豊かな日常性を
取りもどす
作業療法は生生活を支援する知恵と輪

作業療法の目的

心身の安定	安心・安全の保障（心理的サポート）
	基本的機能の維持・改善
生活機能の回復・改善・維持	
心身機能	身体図式・脳地図の修正
	認知運動機能の回復
	精神認知機能の回復
活動機能	生活維持機能の維持・改善
	社会生活技能の維持・改善
	作業遂行機能の維持・改善
参加機能	生活支援，就労支援

リハビリテーションはくらしの中で

心身の機能の障害	治るものは治す	治療
	少なくする	減少
	大きくしない	防止
日常生活の制限	代わりを工夫	代替
	道具を用いる	補助
	人を用いる	援助
参加の制約	環境を変える	調整
	制度の利用	選択

作業をもちいた援助

アセスメント	心身機能と社会機能の具体的な特性評価
ヒーリング ＆ エンパワーメント	自己肯定感と主体性の回復
サポート	QODに視点を置いた生活活動の援助・支援
マネジメント	個人の生活に視点を置いた計画

そのために

心身の機能・構造
医学的知識・技術
生活機能

ひとと作業行動
作業分析
動作・運動分析

作業をもちいる効果

作業の身体性・精神性およびその相互性
　病状の安定と身体の基本機能の維持・改善

作業の目的性と具体性
　主体性の回復　生活技能の習得
　セルフ・アセスメントと自己管理

作業の共有体験
　共にある喜び　自己有用感

} 生活機能の改善

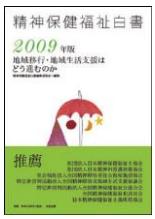
作業療法という仕事

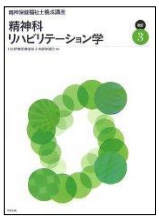
最良であればあるほど
傍目にはあっけないほど単純で
自然な人の関わりとして映る
その特別な場や手法を用いない
平凡さと豊かな日常性が
人間の自然な治癒力を引きだし
病いを「治す」ということから「治る」
さらには「病いを生きる」という視点を照らしだす

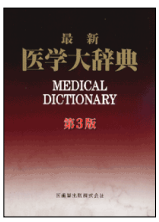
臨床の疑問と言語化の試み

48歳の時偶然から始まった言語化

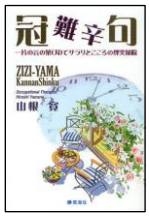
臨床の疑問と言語化の試み







臨床の疑問と言語化の試み



著書（1985～2011）
　共著，単著含めて61冊
原著論文（1984～2011）
　筆頭，共著含めて106編

われわれは
語ることができるより多くのことを
知ることができる

マイケル・ポランニー『暗黙知の次元』

五官を開き
五感に聴き
身体を操る
目的にむけて操る

相関する外界情報と自己情報
脳の地図が描きなおされ
身体のものさし（身体図式）が修正され
身体が意味ある「からだ」となる
私が身体となり
身体が私になる

そして
意味ある「からだ」となった身体により
聴きとられた五感が
世界を私に意味づける

命の質
生活の質
人生の質
養生の生活

ひとは日々の作業を通して
命を保ち　生活や人生の質を保つ